Grawitz 腫瘍の舌根転移例

小田 一成・立川 隆治・川口 和幸
福島 典之・平川 勝洋・鈴木 衛
夜陣 紘治・原田 康夫

Metastasis of Grawitz's Tumor to the Tongue ; A Case Report

Kazunari Oda, Takaharu Tatsukawa, Kazuyuki Kawaguchi,
Noriyuki Fukushima, Katsuhiro Hirakawa, Mamoru Suzuki,
Koji Yajin and Yasuo Harada

(Hiroshima University)

Grawitz's tumor metastasizing to the tongue is very rare. Only six cases have been reported in Japan. We treated a patient with Grawitz's tumor metastasizing to the base of the tongue. The patient is a 66-year-old male with a complaint of dysphagia. He had undergone left nephrectomy for Grawitz's tumor six years earlier, Cryosurgery was performed to reduce the mass of the tongue, but he died of pulmonary metastasis six months later.

Key words: Grawitz's tumor, tongue metastasis, cryosurgery

はじめに

頭頸部領域では、頸部リンパ節以外への悪性腫瘍の転移は少ない。今回我々は、Grawitz 腫瘍で左側腎摘出後に肺転移をきたし化学療法中に舌根部腫瘍が出現し、組織診にて Grawitz 腫瘍の転移が証明された一例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者：66歳、男性。

主訴：嚥下障害。

家族歴・既往歴：特記すべきことなし。

現病歴：1983年2月より無症候性血尿のため、同年3月に当院泌尿器科で、左側腎原発の Grawitz 腫瘍の診断のもとに、左側腎摘出術お

よび傍大動脈リンパ節郭清術をうけた。その後、1985年2月に肺転移のため、インターフェロンと抗癌剤による治療を受けていた。1988年12月から嚥下障害が出現したため、1989年1月4日に近医耳鼻科を受診し、右舌根部腫瘍を指摘され、同年1月9日精査目的にて当科を受診した。

初診時所見：間接喉頭鏡検査で、右舌根部から右喉頭蓋谷にかけ腫瘍を認めた。腫瘍の表面は、赤く一部突出し、その中央は、壊死を起こし白苔が付着しており易出血性であった。頸部の触診では、右頸下部に硬い腫瘤を触知した。

検査所見：頸部CTで腫瘍は、右舌根部から舌、口腔底へ、また中咽頭側壁にまで及び、後方では、ほぼ正中まで腫大していた。また右頸

部へのリンパ節転移を認めた(図1). 胸部レントゲン写真では, 両肺野に多発性転移と肺門リンパ節の腫大を認めた. 腹部CTで左腎は摘出してあり, 局所再発は無く, 肝転移や傍大動脈リンパ節腫大も認めなかった.

病理所見: 摘除腎癌組織像は, 細胞質に富み, 核が比較的小型で均一な clear cell carcinoma の増生像が見られ, Grawitz 腫瘍明細胞亜型と診断された(図2). これに対し, 1989年1月11日に生検を行った舌根部腫瘍の組織像は, 腎の clear cell carcinoma の組織像と非常に類似した像を呈していた(図3). PAS 染色では, 唾液腺の clear cell carcinoma の特徴である粘液成分は認めず, またビメンチン染色にて, 腎癌

において比較的良好に見られるビメンチンが多数認められた. 以上より Grawitz 腫瘍の舌根部転移と診断された.

経過: 1985年より多発性肺転移があることや, 初診時に舌根部の腫瘍が進展していたため, 根治手術としての舌転移巣切除術は行わず, 舌腫瘍よりの出血や疼痛が強いため1990年2月15日 cryosurgery を行った.

手術時所見: 舌根部の術後の浮腫性腫脹による気道閉塞の可能性があるため, 局麻下に気管切開を行い, 気切孔から挿管し, 全身麻酔下に cryosurgery を行った. -100°C で30秒~60秒間, 6カ所, 腫瘍を周囲正常組織を含め凍結した(図4).

図1 頸部CT

右舌口腔底より中咽頭側壁への腫瘍浸潤(*)と, 右頸部リンパ節転移(⇒)を認める.

図3 舌根部腫瘍病理組織像

図2 腎癌病理組織像

図4 術中写真

凍結した組織が白く変色して ice ball となっている. (U: 口蓋垂 Av: 歯槽突起 *: ice ball)

術後経過：泌尿器科でインターフェロンの投与を受け、術後3週までは舌よりの出血は無く経過良好であった。しかし、4月末より肺炎と無気肺を併発し、徐々に全身状態不良となり8月24日呼吸不全のため死亡した。死亡直前の所見としては、舌根部腫瘍は喉頭蓋谷の右側3/4を占め喉頭蓋を軽度圧排していた。

考 察

転移性舌悪性腫瘍の報告は稀であり¹⁾²⁾、悪性腫瘍患者の剖検例の0.1~0.2%に認められるのみである³⁾⁴⁾。また、転移性舌悪性腫瘍中のGrawitz腫瘍の頻度を、Weitznerら³⁾は、15例中3例(20%)と報告している。

表1 Grawitz腫瘍の耳鼻咽喉科領域転移
(里見佳昭,他:1974⁶⁾より転載)

転移部位	例数	%
鼻・副鼻腔	24	38
咽頭	8	13
上顎骨	6	9
下顎骨	6	9
耳	5	8
歯肉	4	6
舌	3	5
扁桃	3	5
その他	5	8

Grawitz腫瘍は、転移を起こしやすい腫瘍であり、原発巣に比べ転移巣の発育が速く、転移巣が先に発見されることも少なくない¹⁾。転移部位は肺、リンパ節、骨、肝の順に多く、他に脳、脾、副腎、皮膚や耳鼻咽喉科領域への転移も報告されている⁵⁾⁶⁾。里見ら⁶⁾は、Grawitz腫瘍の耳鼻咽喉科領域への転移は124例中4例(3%)であり、稀ではなく腎癌の転移しやすい部位として認識しなければならないと述べている。また、耳鼻咽喉科領域への転移症例64例を集計し、最も転移の多い部位は鼻副鼻腔の38%であり、舌への転移は5%と述べている(表1)⁶⁾。我々の検索しえた範囲では、本邦でGrawitz腫瘍の舌への転移は、本症例を含め7例であり、このうち舌根部に発生したものは3例であった(表2)。以下これらの症例について考察する。

年齢は、41歳から77歳(平均年齢59.6歳)で、性別は、男：女=4：3で性差は認めなかった。舌転移部位は、舌背が4例、舌根が3例であり、舌癌の好発部位である舌縁への発生は認めなかった。

Grawitz腫瘍の組織型は、明細胞型、顆粒細胞型、混合細胞型、紡錘細胞型、多形細胞型に分類される。舌転移症例の組織型は明細胞型4例、多形細胞型1例、記載なし2例であった。Grawitz腫瘍の明細胞型は、唾液腺原発のclear cell carcinomaとの鑑別が必要とされている¹⁾。本症例では、舌根部腫瘍

表2 Grawitz腫瘍舌転移報告例

報告者	年齢	性	部位	大きさ	組織型	転 移	舌転移治療	予 後
里 見	41	女	舌背	1.7 × 1.3 cm	不 明	①肺 ②舌	なし	1ヵ月
北 尾	57	男	舌根	2.1 × 1.5 cm	明細胞	①肺 ②舌	摘出術	不明
飯 尾	77	女	舌背	3 × 3 cm	不 明	①肺 ②舌	なし	2ヵ月
山 本	57	男	舌背	小指頭大	明細胞	舌・肺・腸	不明	不明
稲 井	42	男	舌根	3 × 3 cm	多形細胞	舌・肺	放射線・化学	7ヵ月
松 本	77	女	舌背	3 × 3 cm	明細胞	①肺 ②舌	化学	2ヵ月
本症例	66	男	舌根	4 × 3 cm	明細胞	①肺 ②舌	cryosurgery	7ヵ月

組織像は、腎の明細胞型型の組織像と非常に類似しており、PAS 染色で、唾液腺の clear cell carcinoma の特徴である粘液成分は認めず、またビメンチン染色にて、腎癌において比較よく見られるビメンチンが多数認められたことから Grawitz 腫瘍の舌根部転移と診断した。

転移巣の臨床的特徴は、血流が豊富なため色調が赤く易出血性であり^{7,8)}、腫瘍が大きくなると拍動を触れるとされている⁶⁾。全例易出血性であったが、色調が赤いものは 3 例(43%)で、拍動性のものはなかった。本症例は、赤く易出血性の腫瘍であったが、拍動性ではなかった。

舌以外への遠隔転移は、小腸への転移を 1 例、肺転移を全例に認めた。転移の順序は、5 例が肺転移が先行し、1 例は舌と肺転移が同時期に発見され、1 例は舌癌診断後に腎、腸、肺癌が発見されている。Grawitz 腫瘍の転移は、大部分が血行性転移であり⁹⁾、静脈に浸潤しやすいとされている¹⁰⁾。血行性転移の経路は腎静脈から卵巣または精巣静脈から逆行性に骨盤臓器へ転移するもの、Batson 椎骨静脈叢から軸骨格へ行くもの、下大静脈より肺へ行き、さらに左室から動脈を介するものがある¹⁰⁾。また、リンパ行性転移は、所属リンパ節にとどまるものが多い。本症例の舌への転移経路は、左腎静脈へ腫瘍浸潤があることや、肺転移後 4 年経過して舌転移が発見されていることから、血行性に肺転移を起し、肺転移巣から舌根へ血行性転移したものと考えられた。

舌転移に対する治療は、根治手術 1 例、姑息的手術 1 例、化学療法 1 例、放射線と化学療法の併用 1 例、治療なし 2 例、不明が 1 例であった。

舌転移巣の治療方針は、舌転移巣の進行程度、全身状態、他の転移巣の有無・進行程度により決められる。Grawitz 腫瘍の転移巣に対する治療は、切除可能なら手術を積極的に行う傾向にあり⁹⁾、他に転移巣がない場合や、他に転移巣が存在しても進行の遅い場合は、根治手術(舌転移巣切除術)の適応となる。しかし、他の転

移巣の進行の速いものや、進行して発見されたものは、姑息的治療とならざるをえない。

姑息的治療には、cryosurgery やレーザー手術といった手術療法や放射線療法、化学療法がある。放射線療法や化学療法は、通常予後を延長しないとされている⁶⁾。しかし稲井ら⁷⁾は、多形細胞型に、放射線療法と化学療法(adriamycin, cisplatin, cyclophosphamide)を併用し舌転移巣が消失した症例を報告し、明細胞型は、放射線療法、化学療法が無効なことが多いが、組織型によっては有効であると述べている。本症例は、舌転移巣が進行しており、摘出には大きな侵襲が必要なことや、肺転移が進行していることから根治手術の適応とはならなかった。放射線療法は、腫瘍よりの出血の恐れがあり、さらに組織型が明細胞型であることから、放射線療法や化学療法は効果が少ないと考えられた。このため、除痛と止血を目的とし、cryosurgery を行った。cryosurgery は、病変が深在性の場合や、深部まで達している時は、手術効果が深部に及ばない欠点はあるが、手術侵襲が少なく反復して行うことができ、悪性腫瘍の他に、局所の毛細血管を閉塞することから出血性疾患へも適応されている¹¹⁾。我々の症例でも除痛という点では、ある程度の目的を達していたものと考えられる。

舌転移発見後の生存期間は、2 例の生存例を除き平均 3.8 カ月であり、全例肺転移のために死亡している。生存例も報告後の生存期間は不明であり、肺転移は進行しており予後不良と思われる。本症例も肺転移による呼吸不全のため、舌転移発見後 7 カ月で死亡した。

ま と め

Grawitz 腫瘍で左側腎摘出後、肺転移をきたし、化学療法中に舌根部腫瘍が出現した 66 歳男性症例を経験した。治療は、疼痛と出血に対して cryosurgery を対症的に行ったが、肺転移による呼吸不全のため、舌根転移発見後 7 カ月で死亡した。症例を報告し若干の考察を加えた。

本論文の要旨は、第15回日耳鼻中国四国地方部会(高知)において口演した。

文 献

- 1) 北尾健二郎, 渡辺 敬, 宮村健一郎, 他: 舌根に転移した Grawitz 腫瘍の 1 症例. 耳喉 58 : 67~70, 1986.
- 2) 中田将風, 山下隆司, 渡部雄二, 他: 舌根部腫瘍で発症した内分泌非活性副腎皮質癌の 1 例. 癌の臨床 32 : 1855~1859, 1986.
- 3) Weitzner S, Hentel W and Albuquerque NM : Metastatic carcinoma in tongue. Oral Surg 25 : 278~281, 1968.
- 4) Zegarelli DJ, Tsukuda Y, Pickren JW, et al : Metastatic tumor to the tongue; report of twelve cases. Oral Surg 35 : 202~211, 1973.
- 5) 松本充司, 飯尾昭三: 腎癌舌転移の 1 例. 西日泌尿 49 : 1147~1149, 1987.
- 6) 里見佳昭, 松浦謙一, 小川 英, 他: 腎癌の耳鼻咽喉科領域(耳下腺, 鼻腔, 舌, 歯肉)への転移症例. 臨泌 28 : 611~616, 1974.
- 7) 稲井 徹, 香川 征, 淡河洋一, 他: 舌転移をきたした腎細胞癌の 1 例. 泌尿紀要 33 : 1240~1243, 1987.
- 8) 中島成人, 隈上秀伯: 蝶形骨洞および多発性骨転移を来した腎腫瘍 (Grawitz's Tumor) 例. 耳鼻 24 : 198~204, 1978.
- 9) 三杉和章, 里見佳昭: 腎腫瘍. 現代病理学大系 15B (飯島宗一編). 173~210頁, 中山書店, 東京, 1986.
- 10) 梅田敬子, 馬場駿吉, 横田 明, 他: 腎癌による口蓋扁桃転移癌の 1 例. 日扁桃誌 24 : 113~116, 1985.
- 11) 石山英一, 山崎守勝, 増田喜信: 耳鼻咽喉科領域における Cryosurgery の適応症について. 日耳鼻 78 : 237~248, 1975.

(原稿受付: 平成 3 年 1 月 25 日
原稿採択: 平成 3 年 3 月 19 日
別刷請求先: 小田一成
〒734 広島市南区霞 1-2-3
広島大学医学部耳鼻咽喉科学教室)